



書
評

外科系医師のための 手術に役立つ臨床研究

著：本多通孝

A5・頁244 2017年11月 定価：本体3,500円＋税
[ISBN978-4-260-03259-9] 医学書院刊

＜書評者＞ 吉川貴己（国立がん研究センター中央病院胃外科・科長）



ヒトの体や病気のメカニズムはすべて解明されているわけではなく、完璧な治療法也没有。医師は、限定された情報のなかで、先人が積み上げてきた、知識や経験、臨床研究の結果を生かしつつ、現時点で最善と判断される方法で、患者さんの診療にあたっています。診療をしていくなかで、数多くの疑問が生まれます。生まれた疑問は、成書や文献で解決できるものもあれば、できないものもあります。解決できない疑問をどうするか、どうすれば解決できるか、ここに臨床研究の意義が生まれます。

医師として外科医として生きていく以上、診療と研究は切り離せないものです。もちろん、すべては診療から始まります。主治医として、期待どおりの結果が得られれば、患者さんも笑顔を見せてくれますし、医師としてもこの上ない喜びでしょう。ですが、1人の外科医が一生で患者さんにより結果をもたらせる数など知れています。せいぜい数百人、数千人でしょう。一方、患者さんの予後やQOLを改善できるような臨床研究の結果を世界に発信できたとしたら、その報告で世界中の数多くの外科医が診療を変えたとしたら、患者さんへのインパクトは数万人、数十万人となることでしょう。

診療の方法は、成書や文献、上席医師から学ぶことができます。若手医師にも手に取れる、平易な本も数多く、出版されています。では、臨床研究はどうで

しょう？ どのように進めていくのか、勉強するチャンスはなく、「見よう見まね」で行ってきた先生が多いのではないのでしょうか？

本書は、臨床研究のやり方を丁寧に教えてくれます。著者の実経験に基づくと思われる上席外科医と若手外科医のやり取りやその様子、過去に行われた臨床研究の実例を挙げての解説や分析、英語論文執筆の道のり、査読者とのやり取り、研究時間や研究費の確保など、すぐに実践応用できるように書かれています。そこには、“若手外科医に臨床研究の方法を教えてあげたい”という、著者の“愛”が感じられます。若手外科医が陥りやすい視点に対して、わかりやすくコミカルに解説されています。手に取った先生は、楽しく本書を読み進めることができるでしょう。

若手外科医であれば、一度、本書を通読してください。そのあとに、本書を傍らに置き、進捗に合った章を見返ししながら、実際の臨床研究を進めていってください。臨床研究に精通した上席外科医であれば、本書を読むことで知識の整理ができ、若手外科医にどう指導すればよいかを学ぶことができるでしょう。耳の痛い話かもしれませんが、臨床研究をするための環境づくりも進めていただきたいと思います。タイトルは「外科系医師のための～」となっていますが、外科医だけに役立つ本ではありません。臨床研究を志す全ての医師に、手に取ってもらいたいと思います。